

## 《本号の表紙絵》

左 「経穴人形」(北里大学東洋医学総合研究所所蔵)

右 Papier-mâché acupuncture figure (ロンドン科学博物館所蔵)

銅人形は、経脈や経穴を人体模型に附した人形を指し、教育及び技術体得の教材として知られている。もとは銅製の人形全般を指す言葉であったが、北宋の仁宗時代に医官・王惟一が勅を奉じて天聖5(1027)年に鑄造した、いわゆる「天聖銅人」が医学模型を銅人と呼んだ嚆矢と言われている。(長野仁「十四経全図の世界—近世日本における「銅人形」と「明堂図」—」, はりきゅうミュージアム Vol.1 銅人形・明堂図篇, 森ノ宮医療学園, 2001)

日本における銅人形は、銅製のものに限らず、経穴位置を正確に示した模型、すなわち経穴人形を指し、取穴練習のための経穴学教材として活用されてきた。江戸時代においては、味岡三伯は『医学至要抄』(1699年刊)等に製作方法が記され、江戸医学館で教鞭をとった幕府医官・山崎宗運は『銅人腧穴鍼灸図経』の校正補註『天聖銅人腧穴鍼灸図経彙攷』(書写年不詳)を著し、「銅人形」(東京国立博物館所蔵)を製作するなど、経穴人形は江戸時代の経穴学教材として広く普及していた。また、『和漢三才図会』(寺島良安, 1712年自序)には「銅人形」の名が見え、『人倫訓蒙図彙』(蒔絵師源三郎, 1690年刊)には、銅人形を制作する「<sup>(マツ)</sup>銅人形師」なる職業が掲載されており、その当時、多くの医者が銅人形を買い求めていたことがわかる。

ここに紹介する資料は、紙塑(張子)製でその体形が酷似し、同じ型を用いて制作された可能性が高い。写真左は体高70.5cm, 肩幅15.0cm, 紙塑(張子)製, 約5頭身ほどの体型で、胴体に対し頭と腹、手足が大きく作られている。棘突起や12本の肋骨は隆起し、腓腹筋、長掌筋や橈骨手根屈筋の境界に凹凸が見られ、解剖学的知識を踏まえた上で、取穴において重要部位を強調して製作されている。また、取穴の指標となる第7頸椎棘突起や外踝は黒字で丸く囲まれ、経穴名は任脈と督脈を中心線として、左右対称に2字(左側が1文字目, 右側が2文字目)に分けて記されている。ただし、写真左は写真右と比較し、膻中穴が第6肋間に位置し、曲沢穴と尺沢穴の位置が反対に描かれるなど、誤記と思われる箇所が散見する。つまり、各人形の記載には筆記者の理解度や知識が反映されており、銅人形師から人形を買い求めた後、それぞれ経穴経脈を描いていた可能性が高い。全身には分色された14本の経脈が描かれ、腎経は督脈と、脾経は任脈と、胆経は膀胱経とそれぞれ交わり、蔵府経脈のみならず交会穴における十四経脈の交差が描かれている。これらの特徴は、当時流行していた『十四経發揮』(元・滑寿)の影響を示唆するものである。実際には、『十四経發揮』所載の経穴図を見てみると、経穴およびそれらを繋ぐ線を中心として描かれており、本文中に記載される流注については省略されているが、本間祥白著『図解十四経發揮』(医道の日本社, 1946)に図示される『十四経發揮』の流注図と比較すると、本史料と類似している。つまり学習者は、『十四経發揮』に記載される流注を、経穴人形に描画することによって、理解を深めると同時に、より実践的な経穴学習の実現を試みたのである。

両史料からは、江戸時代における銅人形の普及と経穴学習の様相が窺える。

(加畑 聡子)